

た。掘削の結果は一〇センチ前後の表土（腐植土）の下は、明褐色砂質土が一層のみ検出された。この土層は花崗岩のバイラン土であり（いわゆる山砂層）、地山と判断した。表土層内から燻瓦一点が出土したが、その出土した状況からも近代のものであろう。

この調査期間中以外の掘削工事については、豊田市教育委員会に立会調査をお願いした。その結果、遺構・遺物は出土せず、よって、工事は予定通り施工した。調査にあたっては豊田市教育委員会に多大なご協力、ご教示を賜った。記して感謝申し上げるものである。

（徳田誠志）

河内坂門原陵樋門改修その他工事箇所の調査

清寧天皇河内坂門原陵は大阪府の河内平野に展開する古市古墳群の南支群を構成する。全長一一二mを測る前方後円墳で、大きく広がった前方部に特色を有する（第38図）。墳丘は濠で囲まれ、前方部の二本の渡土堤により、上池（拝所側の濠）と下池（後円部側の濠）に二分される。

今回、外堤の後円部北東側に位置する樋門を改修することとなり、同じく北渡土堤基部付近の外堤が陥没したこともあって、その復旧工事と併せて、平成九年三月七～九日および十七日に掘削に立ち会った。

一、樋門改修箇所（第38図A）

当該工事のため、外堤内法裾部の二・五メートル×一・一メートルの

範囲を深さ一メートルほど掘削した。調査箇所は既設樋門により全面攪乱されており、床面まで埋戻しの土で、その上部は有機物堆積層であった。遺物は出土していない。

二、陥没復旧箇所（第38図B）

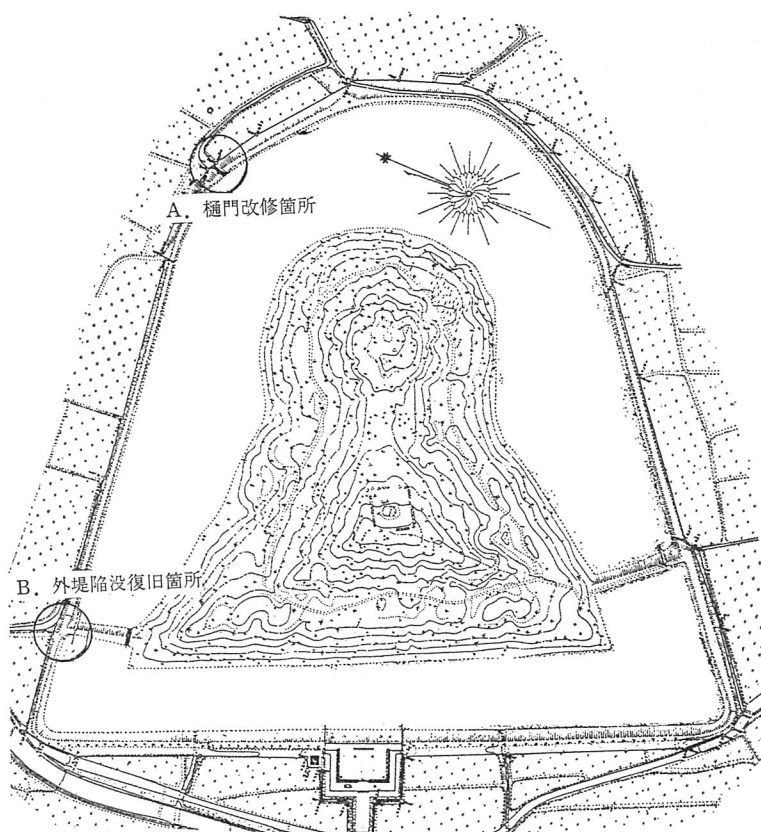
平成八年三月四日に外堤の一部が陥没していることが判明した。該所は北渡土堤との接合部付近で、上池から域外に出水する樋管が外堤下を斜断し、コンクリート止水壁が設けられている箇所である（第39図）。

そのため、樋管の損傷等が疑われ、原因解明とともに、復旧工事を行うこととなった。掘削は約五メートル×三・三メートルの範囲を最深で三・一メートルほど掘り下げた（第40図）。

その結果、大部分は既設樋管の埋戻土であったが、攪乱されていない箇所では築堤するための盛土が厚く観察された。上部で黄褐色、下部で青灰色の土層（Ⅲa）と刃金状に堅く締まった粘質砂質土（Ⅲb）に二分できる。Ⅲa層からは磁器染付、Ⅲb層からは埴輪の小片がそれぞれ一点出土している。埴輪は灰褐色を呈する硬質の製品で、突出度のあまりない突帯部分である。Ⅲb層も土質から近世の粘土刃金との関連性が考えられ、古墳築造時に遡上させることは難しい。また、北壁東端付近でのみ床面近く（標高三八・七メートル）で風化した礫を含む緑灰色粘質土が認められた。地山（Ⅳ）の残丘であろう。昭和五十四年に調査した外堤内法裾の護岸工事に伴う事前調査時（本誌第三二号参照）の地山検出レベルに比べて、高く位置することが注意される。

なお、陥没の原因は埋殺しにされた旧樋管内を水路（側溝）から逆流した水が、徐々に浸透したためとわかった。
 工事は予定どおり施工した。

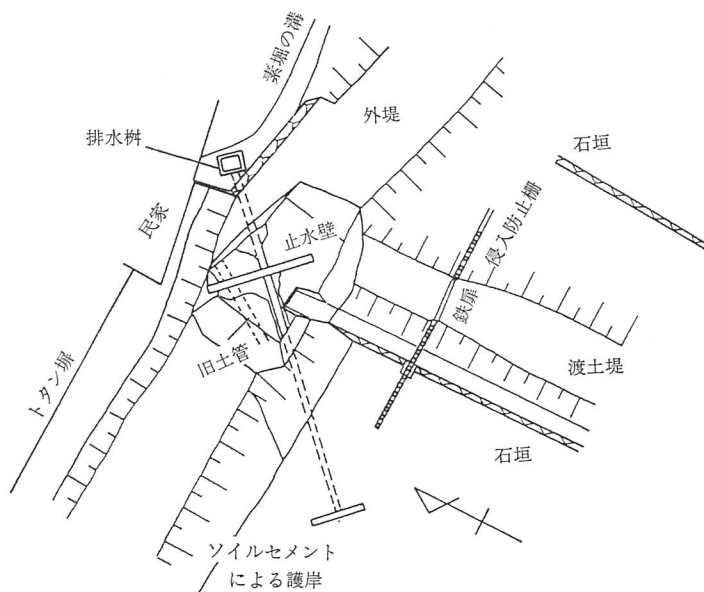
（福尾正彦）



第38図 河内坂門原陵調査箇所的位置 (1/2000)

奈良市北郊に位置する成務天皇の狭城盾列池後陵は、本誌前号で既報

狭城盾列池後陵墳塋及び外堤護岸整備工事箇所の調査



第39図 河内坂門原陵外堤陥没復旧箇所平面図 (1/100)